

哲學研究

第六十二號

第六卷
第五冊

プラトーンの美學（承前）

深田康算

十

吾々の見る所に依れば「フェドロス」に於て特に高調せられてゐる身體美は、プラトーンの美學全體に取りて極めて重要な意義を有してゐると思はれる。此の概念が、云はゞプラトーンの美學體系に於ける中心的生産的契機として、擔つてゐる所の重要な役目は凡そ三通りあると見ることが出來やう。其第一は、其自ら美なるものとして「觀照に於て已に觀照者に快感を與へるもの」として、又「視聽二覺に於て與へらるゝ快感」として「フレイボス」「ゴルギアス」及び「大ヒ比亞ス」に説かれてゐる美の諸規定を總括することである。其第二は、是等の諸規定を斯く總括すると共に、「美のイデア」の特

殊性を「フェドン」に於ては其が云はゞ單に抽象的に規定せられてゐるのみであるのに對して、具象的に規定せしめることである。其第三は、精神美を、換言すれば「シムボジオン」に於て高調せられ、身體美を單なる其の影たるに過ぎぬものたらしめる所の精神美を、——恰も身體美の高調に依りて、——導入し來ることである。第一と第二とは、身體美の概念が、プラトリーの美學に於て美を正當に規定せしめる爲めに有する所の役目であり、第三は、之に反して美の特殊性と獨立性とを、美を善に還元することに依つて、遂に見失はしめるに至るとも云へる所の其である。此の如くに種々なる、云はゞ矛盾せる諸見地を一括するの役目を擔へるものとして、嚴密に云へば、一方に於て美の特殊性の規定を可能ならしめると共に他方に於て此の如き規定を不可能ならしめるの役目を擔へるものとして、身體美の概念はプラトリーの美學に於て吾々の特別なる注意と興味とを惹くのである。此云はゞ體系的なる興味に比する時、希臘的愛との關係に於ける身體美のプラトリーに依れる高調の史的制約や、人間美としての身體美の高調やに對する史的及び人間的興味は、異竟從屬的なるを免れない。

身體美の概念がプラトリーに於て有する役目の第一に關しては、問題は身體美が果して此役目を正當にさうして十分に成し遂げてゐるか、成し遂げ得るかに在る。之

れを小別して考へれば、第一には身體美のみの高調は美に就ての他の諸規定を總括し得ないのみならず、寧ろ其等と全く矛盾するものではないか、問題となる。さうして明瞭に説かれてゐる所のものゝ上から見れば、それは疑を挿む餘地もない程に全く矛盾してゐると云はれなければならないやうである。「フレイボス」「ゴルギアス」及び「大ヒピアス」其他に於ては身體美のみならず他の諸種の美が語られてゐるのに、「フェドロス」に於ては唯身體美のみが語られてゐるのである。「ワルター」が矛盾として指摘してゐるのは此點である。前掲九參照。併し「フレイボス」以下に對して「フェドロス」が立つてゐると云はれる所の矛盾は、吾々の見る所に依れば、其が「シムボジオン」に對して立つてゐると云はれる所の矛盾とは實は決して同じでないのである。「フェドロス」の所説は或意味に於て正當に「シムボジオン」の所説に對して矛盾してゐるとも云ひ得るであらう。併し前者の場合に於て矛盾として指摘せられてゐるのは、一方が多くのものに就て語つてゐるのに他方は唯其中の一つに就てのみ語つてゐると云ふことに過ぎない。之れを指して矛盾と正當に呼び得るためには、一方に於て唯其のみに就て語られてゐる所の一つが、他方に於て語られてゐる所の多くのものゝ中の一つではないこと、寧ろ其等のものと全く矛盾するものであることが指

摘せられなければならぬことは云ふ迄もないであらう。そこで「フエドロス」に於ける身體美は果して「フイレポス」以下に與へられた美の諸規定と矛盾するものであるか、問題となる。さうして、若し矛盾せぬものであることが明瞭になるのであらうならば、プラトンは成程、一方に於ては多くの美に就て語り他方に於ては唯一つの美のみに就て語つてゐる點、加之是等の多と一とが如何に關係するかを語つてはゐない點に於て、語つて詳かならざるものと云ふ批評は受けなければならぬであらうが、其所説に矛盾があると云ふ非難を甘受すべき理由はなくなるであらう。問題は、プラトロンが「フエドロス」に於ては身體美のみに就て論じてゐると云ふ點ではなくして、寧ろ「フエドロス」に於て其のみが論せられてゐる身體美は果して「フイレポス」以下に規定せられたる美の諸性質と矛盾せるものを含有するか否かと云ふ點である。さうして、此第二の問題に就て考察を進めて見るならば、吾々は容易に兩者の間に矛盾の存しないことを觀取し得るであらう。

「フエドロス」に於て高調せられてゐる身體美が、其自ら美なるものであり、觀照に於て已に觀照者に快感を與へるものであり、さうして「視聽二覺に於て與へられたる快感」であること、従つて「フエドロス」と「フイレポス」「ゴルギアス」及び「大ヒippiアス」との間に矛盾

の存せぬことを明示してゐる所のものは、蓋し二つあると云へる。一は「フェドロス」の全體を通じて吾々が觀取し得る所の藝術的具象的なる身體美に就ての見方である。美なる少年の身體は此所では藝術家の眼を以て、若しくは藝術觀照者が希臘彫刻に對するであらう所の能度に於て、眺められてゐる。其は即ち其自ら美なるもの「觀照に於て、已に觀照者に快感を興へるもの」として取扱はれてゐる。或他のものゝ爲めに、若しくは或用の爲め或善の爲めに美なるものとせられては居らないのである。他は此身體美を説明する原理として擧げられてゐる所の「美のイデア」である。身體美の美なる事が他の何ものに依りても規定せられずして「美のイデア」に依りて規定せられてゐることは、さうして「美のイデア」の特殊性が其可視性にあると云はれてゐるとは、身體美が「其自ら美なるもの」であり、觀照に於て已に觀照者に快感を興へるものであることを最も能く示してゐると云はなければならぬ。加之プラトニーが身體美に就て語つてゐる他の個處を參照して見ても、彼が身體美を其自ら美なるものと見做したこと、其の規定原理を例へばソクラテスが好んで爲したと察せられるが如くに合目的性や道德性の原理の中には求めなかつたこと、又身體美を單なる形式や色彩の所謂感覺的形式的要素に依りて規定せられるものとせずして、寧ろ之れ

を云はゞ其全體としての印象の上に基けたことは疑ふべくもないと思はれる――例へば、プラトールがソクラテス風に身體及び身體の各部分の美を合目的性に依りて説明しやうとはしなかつた證據として、『國家論』第四篇四二〇Cに於ける眼の美しさに就ての言説の如きは、クセノフオンの『シムボシオン』第五章に於けるソクラテスの詭辨に對して極めて興味ある對照をなしてゐる。又『ゴルギアス』四五二Bに於ては、身體の訓練は身體を美ならしめる事とさうして強からしめることとを目的とするものであると云はれて居り、強健が直ちに美の理由たるものではないとせられてゐることが窺ひ知られるやうにも思はれる。併し是等の個處は其丈で吾々の論斷の根據として引照せられるには云ふ迄もなく甚だ薄弱である。吾々の根據たるべきものはどうしても上に述べた『フェドros』の個處を主要なるものとしなければならぬであらう。美の規定が形式や色彩やの所謂感覺的形式的要素に依りて興へられぬことを最も明瞭に語つてゐる個處としては、『フェドン』一〇〇DEが特に擧げらるべきである。身體に就ての具象的叙述を含むこと最も多きさうして色々な意味で興味深き『チャイオス』に於ける言説に關しては後に述べる所に譲らうと思ふ。蓋しプラトールは一面に於てはソクラテスの善即美の思想の繼承者である點から――此

點に關しては併し其にも拘はらず兩者の間に存する差異を十分に注意しなければならぬ——さうして他面に於ては希臘國語に於ける「美」なる言葉の用法の點から——此の點に關しては此言葉が希臘國語に於て有する種々の色合ひ及び叙事詩抒情詩劇詩及び哲學に於ける用法の變遷等々を注意すべきである——善を即ち美と呼んでゐる所が少くない。(其著しき例は「*チマイオス*」[八七C]「國家論」第四篇四四四E「法律論」第二編六五五B等であらう。尙「*フレボス*」[六四E]「*フエドン*」[六〇D]も參考となる)。然しながら是等の個處に基いて、或人々の爲すやうに、直ちにプラトーンを以て善即美論者であると云ひ、若しくは又希臘國語に於ては美とは即ち善を意味すると云のは極めて粗野な見解である。(此點に關係ある一つの問題として「美にして善なる人」*καλοκαγαθός*「美にして善なること」*καλοκαγαθία*なる言葉及び概念の發生用法及び意味は別に考察せられなければならぬ。之れを以て直ちに美と善との合體としての極致として所謂希臘的理想と見做す如きは少くとも早計たるを免れないであらう)。是等の個處の多少綿密なる検査は、容易に吾々をして此見解の誤謬を指摘し得せしめるのみならず、上來述べた所及び後に述べる所からして、プラトーンが善と美との異別性の問題に對して深い注意を拂つたことは疑ふべくもないと思はれる。此所で

已に明らかになつた所から云つても、美のイデアに依れる美の規定及び可視性としての「美のイデア」の特殊性の規定は、其れ丈で已に少くとも美の獨立性をプラトールが十分に注意したことを證據立てゐるのである。さうして、其點から云つて最も重要な、従つてプラトールの美學に於て最も重要な、此「美のイデア」の導入と加之其の特殊性の規定とが、實に身體美に依りて、身體美の高調に依りて、始めて可能となつたのであると云ふ意味に於て、「フェドロス」に於ける身體美の概念は重要視せられなければならぬのである。

斯くして吾々は(一)「フェドロス」に於ける身體美の概念は決して「フィレボス」以下に與へられたる美の諸規定と矛盾するものでないこと、(二)寧ろ恰も身體美がプラトールに取りては「美のイデア」の導入と其の特殊性の規定とを始めて可能ならしめたのであることを知る。——云ふ迄もなく、之が吾々の解釋であることは、十分に注意して置かなければならない。さうして之が吾々の單なる解釋に過ぎぬものであるかも知れぬことを吾々は忘れてはならぬであらう。吾々の已に知つた如く、プラトールの明らかに *explicit* 述べてゐる所のものは三つの事——(一)身體美が他の諸種類の美と共に美なること、(二)總て美なるものは「美其自若しくは「美のイデア」への分與に依りて美な

ることさうして(三)身體美は「可視性」を其特殊性とする所の「美其自若しくは「美のイデア」への分與に依りて美なること——であるが、此三つの事はプラトニーに於ては明らかには相互に關係なく、若しくは明らかに「矛盾」して、與へられてゐる。此矛盾の所在を指示する所のは、即ちプラトニーの是等の言説に對して起り來る二つの疑問——(一)若し身體美が他の諸種類の美と共に美であるのならば何故に身體美に就てのみ「美のイデア」への分與が高調せられてゐるのであるか、(二)若し總ての美が盡く皆「美のイデア」への分與に依りて美たるのであるならば如何にして「可視性」が「美のイデア」の特殊性たり得るのであるか、——である。プラトニーは身體美が他の美と共に美なることを云つては居るが、身體美が諸種類の美の中に如何なる地位を占めてゐるか、其と他の美との關係さへもが、況んや其が代表的若しくは根本的地位を占むべきものなることは何處にも論明して居らない。其故に一方に於て諸種類の美を擧げてゐながら他方に於て唯一つの身體美を高調してゐることが矛盾でないかと非難されるのである。又プラトニーは總ての美が美たるのは「美のイデア」への分與に依るのでなければなるまい否、依るのであると云つてはゐるが、「美のイデア」への分與に依りて美たる事の詳論せられてゐるのは身體美のみに就てあり、さ

うして「美のイデア」の特殊性は其場合可視性に在ると規定せられてゐる。他の諸の美が如何にして可視性を其特殊性とする所の「美のイデア」への分與に依りて美たり得るかは何處にも説かれてゐない。其故に身體美に就て説かれてゐる「美のイデア」が果して總ての美を美たらしめる「美のイデア」なのであるかは疑問となる。さうしてプラトールが此矛盾と疑問とに對して明らかに答を與へては居らぬことを吾々は承認しなければならぬ。例へば、音樂の美の如き制度(風俗)の美の如きは如何なる意味で「美のイデア」に分與すると考ふべきであるか、如何にして是等が可視性を其の特殊性とする「美のイデア」に分與すると考ふべきであるか。又例へば内的美と外的美との分類に於て其孰れに是等の美は屬すと考ふべきであるか。是等の間に對してプラトールは全く何等の明答をば與へて居らぬと云はなければならぬ。問題はさうであるからして、身體美はプラトールに取りて明らかにさう論述せられては居らぬに拘はらず、實に矛盾なくして諸の美の代表者たり中心たるものであつたのではないか。さうして可視性を其の特殊性とする「美のイデア」は從つて又諸の美を美たらしめる「美のイデア」なのではないかと云ふ點に在る。さうして吾々の解釋が多少正しくはないであらうかと思はれるのは恰も此問題を、敢えてプラトールに矛盾を認

めることなしに、解き得るかの如く見えると云ふ點に基いてゐる。

蓋し「フェドロス」に於ける身體美の概念が「フィレポス」以下に與へられてゐる諸規定と矛盾するものでないことは、已に述べた所から恐らく十分に明らかになつた。さうして、身體美が他の諸の美と矛盾しないのみならず、尙一步を進めて、寧ろ其がプラトニに取つて總ての美なるものゝ代表者たり中心者たるのであると云ふことを推測するのは決して困難ではない。プラトニの美學の核心を提供してゐる「フェドロス」に於て身體美のみが高調せられてゐる事實は此場合重要な根據の一つとなるであらう。さうして身體美に就てのプラトニの見方が、身體美を以て單なる形や色彩や等の所謂形式的要素の上に立つものとするのではなく、一個の人間の身體としての全體的印象の上に立つものとするのであることは、吾々の推測の重要な第二の根據となる。身體美をプラトニの如くに斯く見るとは總ての美が畢竟身體美若しくは人間に於て其代表たり其中心たるものを見出すと做す考へ方へ寧ろ導き行かなければならぬと云ひ得る。吾々の考ふる所に依れば、プラトニが「フェドロス」に於て身體美のみを高調したことは、單に此對話篇の主題に依りての制約の爲めに餘儀なくせられたのでもなく、「フィレポス」以下の所説と全然無關係なる考へ方でもなく、況

んや其等と矛盾する思想に牽かれたのでは尙更なくして寧ろプラトールが美に就ての深い洞察からの所産として吾々の特に注目すべきことなのである。さうして斯く考へる時、身體美に就てのみ語られてゐる「美のイデア」の特殊性たる可視性が總ての美をして美たらしめる所の「美のイデア」の特殊性であり得ること、若しくは、あらねばならぬことも亦自ら明らかであらう。プラトールの所謂 *Εἰδωλότυπον* は美の特殊性でなければならぬ。「フエドン」に於て單に抽象的に語られてゐるに止まれる「美のイデア」は「フエドロス」に於て具象的に其の特殊性が規定せられてゐるのである。——斯くして吾々は又「フエドロス」に於ける身體美の概念が其がプラトールの美學に於て擔はしめられてゐる第二の役目を果してゐることをも知る。(未完)